

福島復興に向けた地元住民と国内外の専門家による ICRP/JAEA ダイアログミーティング

The Dialogue Meeting between Local Residents and Experts for
Rehabilitation of Fukushima by ICRP and JAEA

*遠藤 佑哉¹, 前田 剛¹, 植頭 康裕¹, Jacques Lochard², Christopher Clement²,
藤田 博喜², 安東 量子³

¹日本原子力研究開発機構, ²国際放射線防護委員会, ³福島ダイアログ

日本原子力研究開発機構（以下、「JAEA」）は、福島環境回復及び福島第一原子力発電所（以下、「1F」）の廃止措置に係る研究開発を通じ、福島早期復興への貢献を目指している。JAEAは、地元住民とのコミュニケーションを通じて、地元住民が放射線に係る疑問を解決するための一助となることを目的に、国際放射線防護委員会（以下、「ICRP」）と共同で平成30年12月にダイアログミーティングを開催した。

キーワード：ダイアログミーティング, 復興, 継承, 福島第一原子力発電所事故

1. 緒言

JAEAは、1F事故を受け、事故直後から福島環境回復及び1Fの廃止措置に関する研究開発を進めている。また、現在福島県では、復興に向けた活動が加速しているが、一方で地元住民や企業等は未だに放射線に係る課題や疑問を有している状況にある。そこで、地元住民の一層の理解促進に資するため、科学的な情報を地元住民へ提供し、地元住民が疑問を解決するための一助となるように、ICRPと共同で平成30年12月にダイアログミーティングを開催した。

なお、本ミーティングを実施するに当たり福島ダイアログ実行委員会に運営協力をお願いした。

本報では、本ミーティングを通してJAEAが得られた成果及び地元住民とともに考察を深めた、1F事故から何を学び、何を継承していかなければいけないのかについて報告する。

2. 取り組み

本ミーティングは、地元住民を対象とした放射線防護に関する講演会と意見交換会で構成され、地元住民や企業、被災地外の住民、国内外の専門機関といった幅広い地域、世代、職業の方が参加した。

講演会セッションでは、1F事故後に自分たちの置かれた状況や取り組んできたことについて発表した。

意見交換会セッションでは、テーマ「私たちは、事故とその帰結の記憶を残すためになにを生み出すべきか。さまざまな人々となにを分かち合うべきか。次の世代に何を伝えるべきか」のもと、12人の参加者がそれぞれ意見を発表した。

3. 結果・考察

講演会セッションでは、様々な立場における福島復興への取り組みや考えについて共有した。また、JAEAによる専門機関の観点からの口頭発表では、1F事故への過去の対応状況や現在の状況等を紹介し、住民から継続的な情報発信の要望を得られた。

意見交換会セッションでは、1F事故で得られた経験を大きく3種（感情、事実（震災時の状況や科学的な値等）、教訓）に分類し、それらを誰へどう継承するかについて意見が交わされた。各参加者の置かれている状況により意見は様々であったが、共通意見として、感情の共有は難しいこと、職業・年齢・国等に捕らわれず多種多様な相手と経験を共有し継承すること、継承する情報を絞らずに地域全体の活動や個々の経験、1F事故前後の状況等様々な情報を継承していくことがあげられた。

本ミーティングにより、各自がこれまでの活動を振り返るとともに様々な相手と経験を共有する機会が得られた。これを踏まえ、それぞれが今後の活動について検討を深めていくことが重要である。JAEAにおいては、今後も研究成果を広く情報発信し続けていくことが重要である。

*Yuya Endo¹, Tsuyoshi Maeda¹, Yasuhiro Uezu¹, Jacques Lochard², Christopher Clement², Hiroki Fujita², Ryoko Ando³

¹Japan Atomic Energy Agency, ²International Commission on Radiological Protection, ³Fukushima Dialogue